
とある戦符と決闘正義（デュエルバスターズ）

朱鳳鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デュエルバスターズ
とある戦符と決闘正義

【Nコード】

N5683U

【作者名】

朱鳳鈴

【あらすじ】

今ここに新たなるデュエルが交差する……かもしれない

この小説を見るにあたっての情報（前書き）

主人公補正？そんなのあるにきまつてるじゃん。

この小説を見るにあたつての情報

どうもーアップ主の朱鳳鈴^{しゅほうりん}です。

ここでの作品は初めて書くので書き方がよくわからなかったりします。(そんなことはどうでもいいな)

それより、僕1人じゃ花がないので、それぞれのところから2人打つ出してみましようか。

それでは記念すべき1人目は、とある魔術の禁書目録から主人公、上条当麻^{かみじょうとうま}さんです。(ぱちぱちぱち)

上条「アニメが終わっちまってるがニコニコ動画とかにぴっぱりばこだ。正直疲れている。なんかこう不幸だ。」

朱鳳鈴「まあ、そんなこと言わずにね。それに僕の場合ニコニコ行つても架空デュエルしか見ないからあなたがどのくらい引つ張りばこなのかがわかりませんし。」

上条(そんなので大丈夫なのか?)ひそひそ

朱鳳鈴(大丈夫だ!問題ない。)ひそひそ

朱鳳鈴「それでは次の方を呼んでみよー。同じく禁書目録から姫神^{ひめが}秋沙^{あきさいさ}ですー!。(パチパチパチ)

上条「えっ!」

姫神「ありがとう出させてくれて。」

朱鳳鈴「いえいえ。消して同情なんかではありませんよ。最初はインデックスさんをだそうかなーと思ってましたが、どこの架空デュエルでもあなた出てこなかったりしているので、なんとなく出しただけですし。」

上条(こいつすらつともものすごいこと言つたぞ)

そんなこと言つたら姫神はものすごく落ち込んだ。アニメを見ている人なら見たことあるあろうがそれ以上に落ち込んだと思えるくらいだ。

朱帆鈴「それじゃ次つてみよう。とある科学の超電磁砲の主人公、

御坂御琴さんです。はい、拍手。」（パチパチパチ）

上条「なんだ、今度はビリビリか。」

御坂「あんた、私を見るたび、見るたび、ビリビリ、ビリビリ行っ
てじゃないわよ。」

といって御坂さんはレールガンを撃ったそう、上条さんの近くに僕
こと朱鳳鈴がいるのに……。

まあでも僕は焦らない。なぜなら。

上条「あぶねじゃないか。殺す気か？」

御坂「死んじやえばいいのよ。」

朱鳳鈴「あのー御坂さん、夫婦喧嘩はどこかでつのとこで……。

」

やってくださいといようとしたり、いきなり全身がしびれた。

御坂・上条「だれが夫婦なのよ（なんだ）。」

朱鳳鈴（声をそろえて言ってるあたりすごいな。」

朱鳳鈴「それでは次行ってみよう。」

御坂・上条「無視するな。」

朱鳳鈴「だって、あなたたちと口論したら、あとどれだけ書かな
いといけないか。考えてください。」

御坂・上条「……すいません。」

朱鳳鈴「素直でよろしい」「それでは気を取り直して次の方はこの
人だ。同じくとある科学の超電磁砲の初春飾利さんういはるかざりです。はい、拍
手。」（８８８８８）

初春「初めまして、こんにちは。初春飾利です。」

朱帆鈴「なんか、ものすごく久しぶりにまともな自己紹介が……。」

初春「どうして泣くのですか？」

朱鳳鈴「いや、自己紹介はこうでなくちゃなと思っただけでして。」

初春「そうですか。」

朱鳳鈴「はい。さっきがさっきでしたので。」

初春「（それってあなたがそうしたのは……）」

朱鳳鈴「それでは、次行ってみよう。」

初春「（前向きなのか後ろ向きなのかわかりませんね。）」

朱鳳鈴「次は、リトルなスターズより主人公、直枝理樹さんなおえりきです。はい、拍手。」

みんな（８８８８８８８）

理樹「こんにちはです。直枝理樹です。以後よろしくお願いします。」

朱鳳鈴「うん、これが、そうこれが、僕が求めていた。ものなんだ
—————。」

理樹「え〜〜〜どうしていきなり大声出しているのですか？」

初春「なんか、いろいろとあったらしいですよ。」

理樹「そうですか。」

朱鳳鈴「おつと感動している場合じゃなかった。それでは、最後の方読んでみましょうか？最後を飾るのはやっぱこの人しかない、同じくリトルバスターズから・・・なつめきょうすけ 棗恭介さんです。」

恭介「みんな、ひとこと言っていいいか？」

みんな「？」

恭介「リライトはやったか—————。」

みんなこけました。そうマンガみたいに。

恭介「どうした。みんな足腰が弱いな。そうだ、今から真人呼んでこよう。」

朱鳳鈴「あの、御坂さんお願いがあります。」

御坂「何？」

朱鳳鈴「あの人に、超特大のレールガンうつてください。」

といい僕は頭を下げてお願いしたが・・・

御坂「いや。」

朱鳳鈴「そこをなんとか。」

御坂「あなたも知ってるでしょ。ここは学園都市ではないから能力のしょ・・・。」

朱鳳鈴「わかりました。ならこれでどうです。といって僕は、ゲコ太スリーブを見せた。」

御坂「わかったわ。」

速攻でOKしてもらえた。さすがゲコ太好き簡単にOKしてくれたな。

そのあと、恭介の悲鳴が聞こえて、30分後。

朱鳳鈴「なんか、登場させるだけで約2000字も使うなんて思わなかった。」

上条「それは、お前が何も考えずに書いてるからだ。」

と上条がいったらみんなうなずいた。

朱鳳鈴「そんなことはどうでもいいじゃにですか。それじゃ、そろそろ説明のほうに入りましょうか。」

それを言うともみんなうなずいてくれた。

あとここでの出来事は、本編に関係ないからあくまで説明のための登場というだけで、関係はない。

上条「で、どんなことを言うのだ、時間的には第2期終了ごだよな。」

朱鳳鈴「はい、あの後、一步通行さんとかがどっかいくみたいです
が、原作を知らないの、あの人たちは、どっかに行くが、その
下準備中だともってかきますので、あしからず。」

姫神「それで大丈夫なのが心配なせりふがきこえたきがするけど
まあ大丈夫なんですよ。」

御坂「わからないわ、でも作者はそうするみたいだよ。」

朱鳳鈴「はは。」

初春「こんなので大丈夫なんでしょうか？」

朱鳳鈴「大丈夫だ！もんだ・・・って2回も言わせないください。」

理樹「言おうとしたのあなたです。朱鳳鈴さん。」

朱鳳鈴「・・・っ！次行くぞ次。え〜とリトルバスターズは物語
終了後であり、二木さん、笹瀬川さん、沙耶もです。一応そのス
トーリーも考えてます。番外編でいつか出そうとは思いますが、書
かないかもしれないことを最初に謝らせてください。」

恭介「なるほど、理樹と鈴はもうあの世界から出てきたのか。」

朱鳳鈴「あと、余談ですが、今回のストーリーはものすごくめちゃくちゃです。いやもう、くちゃくちゃだ。」

理樹・恭介「！」

朱鳳鈴「どうしました2人とも。」

理樹「なんでもないよ。ねっ恭介。」

恭介「ああ、なんでもないな。」

朱鳳鈴「あと、こんかいは出してませんが、遊戯王キャラを3人か出すつもりです。（初代からだけです）」

朱鳳鈴「禁止などは、OCGに合わせます。あと僕も小説に出ます。さらにアニメオリジナルカードが出てくるかもしれません。」

朱鳳鈴「それでは最後に皆さんから一言ずついたadakましようか。最初は上条さんから出てきた順にどうぞ。」

上条「馬鹿な作者だが付き合ってくれよな。」

朱鳳鈴「不幸にバカ呼ばわりされたくない。」

姫神「私は、作者に聞きたい、なんで私の出番少ないのかを。」

朱鳳鈴「書くのが難しいからです。」

御坂「はあくなんかだべって終わったような気がするけど。」

朱鳳鈴「うるさいです。なんなら、夫婦ばく書いてあげましようか？」

御坂「あとで覚えときなさい。」

初春「よろしく願います。」

朱鳳鈴「普通だな。」

理樹「これから、よろしくおねがいします。」

朱鳳鈴「あんたもかい。」

恭介「リライトのほうをやるんだな。」

朱鳳鈴「自分のゲームのほうを応援しろ。」

朱鳳鈴「これからよろしく願います。ライフミスとか手札ミスとかしないように頑張ります。」

みんな「それでは次回をお楽しみに。」

この小説を見るにあたっての情報（後書き）

朱鳳鈴「疲れた疲れた、さて第1話を書きましようかね。」
ガチャリ

朱鳳鈴「どうしました、御坂さん。」

御坂「あんた、私が最後に言った言葉忘れたわけじゃにでしようね。」

朱鳳鈴「えっ！あ・・・あ・・・うわーーーーー！。」

第1話 前日？（前書き）

連続はもうないだが続くんだなこれが・・・はあゝ

第1話 前日？

現在僕たちリトルバスターズメンバーは学園を離れてとある場所に
恭介の車にて向かっている

恭介「ふふふ、ふふふ、ふふふん」

理樹「ご機嫌だね。恭介」

恭介「当たり前だろ。学園都市だぜ。戦符際だぜ。デュエルキング
だぜ。現チャンプ武藤遊戯とデュエルだぜ」

理樹「はは」（この前からそれバカだね恭介）

とかなんとか思っていたら後ろのほうで騒がしくなってきた。

真人「やんのか？」

健吾「受けてやろう」

真人・健吾「デュエル」

鈴「うっさいんじゃないボケー！」「ゲシゲシ

たぶんだと思うけど、鈴が2人をけったと思う。

笹瀬川「棗鈴。あなた、今宮沢様まで蹴りましたわね」

鈴「さささささささみ！」

笹瀬川「笹瀬川佐ヶ美ですわ。あなたは私に喧嘩を追っているつも
りですの？」

鈴「いや。打ってないし、でもげんにうるさい2人をけって何が悪
い」

笹瀬川「関係ないですわ。お前たちやっておしまいって、今はあの
子たちいないでしたわね。それじゃわたくしがじきz・・・」

二木「うるさいわよ。あなたたち、ここは学園の外なのよ、少しは

理樹「沙耶もしかして寝てたの？」

沙耶「何言ってるの理樹君私がこんなところで寝るわけないじゃない」

理樹「でも目の焦点あつてないよ」

[illegible]

理樹「自虐モードに入ってしまった」

バス内のみんな（少し落着こう）

第1話 前日？（前書き）

ちよつとした話

第1話 前日？

理樹（なんでこんなことになったかそれはさかのぼること3週間前）
いつもの教室にて

教師A「えゝ3週間後に学園都市で行われる。戦符際に我が校は参加することになった。よってこれから2週間と4日で我が校の選抜メンバーを決めることになった。代表者は各学年50人ずつだ。それじゃがんばれよ」

それだけを言うと先生は教室から出て行ったその数分後。

クラス全員「なんだってーーーーー」

その後、学年集会があつて明日から選抜チームの決める大会だとかいろいろあつた。

理樹（まあゝこんなことがあつて僕らリトルバスターズはあろうとかか全員選抜メンバーにはいつていた）

数時間後

荷物なんかを置いてすぐありて外に出ると恭介がいた

理樹「やっと着いたね。学園都市に」

恭介「オラ、わくわくすつぞ」

理樹「でも大会は明日だよ」

恭介「くつ、なら理樹お前が相手をしろ」

理樹「別にいいけど。どこですなの？」

恭介「ここでだ」

理樹「どうやって？」

恭介「こいつ出やる」

と恭介はデュエルディスクを出してきた。

理樹「恭介それどうしたの？」

恭介「さっき荷物お氣に行ったときに置いてあったぞ」

理樹「嘘。きずかなかった。今からとってくる」

恭介「おう」

数分後

理樹「机の上にあつたよ。それじゃやろうか」

恭介「おう」

理樹・恭介「デュエル！！！！」

第1話 前日？（前書き）

やっとできた。

つぎはもう少しだけ早くしますが、テストがあるためきついです。

第1話 前日？

理樹LP4000VS恭介LP4000

理樹「僕から行くよ。ドロー。」

手札から魔法カード「融合」発動。手札の「E・HEROバーストデュー」と「E・HEROフェザーマン」を融合、融合召喚「E・HEROフレイムウイングマン」そしてカードを1枚セットしてターンエンド」

理樹LP4000 手札2枚

恭介「俺のターン。ドロー。」

俺は、D・HEROダイヤモンドガイを召喚、エフェクト発動、デキトップをめぐりそれが通常魔法ならそのカードを墓地に送り次のターンのスタンバイフェイズ時に発動する。

デキトップは・・・通常マジック「トレードイン」。次のターンエフェクト確定だ。

カードを2枚セットしてターンエンド」

恭介LP4000 手札3枚

理樹「僕のターン、ドロー。」

スタンバ、メインを飛ばしてバトルフェイズ。

「フレイムウイングマン」で「ダイヤモンドガイ」を攻撃。”フレイムシュート”

フレイムウイングマン ATK2100VSダイヤモンドガイ ATK1400

恭介「この瞬間リバースカードオープン、トラップカード「D・シールド」このカードは、D・HEROを守備にして戦闘破壊を無効にする。その後装備カードなりそのモンスターに装備する」

理樹「ならメイン2に入り、カードガンナーを召喚効果発動、デキトップから3枚までカードを墓地に送り、送った枚数分×500Pエンドフェイズ時まで攻撃力・守備力がアップする。僕はこれ

により3枚落とすよ」

落ちたカードE・HEROネオス、ネクロ・ガードナー、E・HEROネクロダークマン

カードガンナー ATK400・DEF400↓ATK1900・DEF1900

理樹「カードを1枚セットしてターンエンド。」

カードガンナー ATK1900・DEF1900↓ATK400・DEF400

理樹の手札2枚 LP4000

恭介（何でこのタイミングでガンナーの効果なんだ？）

恭介「俺のターン、ドロー」

「スタンバイフェイズ時、前のターンのトレード・インの効果で2枚さらにドロー」

理樹「確か、ダイヤモンドガイで落ちた魔法カードのコストは・・・」

恭介「ああ払わなくていいな」

「メインフェイズ1に入り、ダイヤモンドガイの効果発動、デッキトップは・・・通常マジック「デステイニードロー」次のターンエフェクト確定だ。」

そして、ダイヤモンドガイ2体目を召喚してもう一回発動、デッキトップは・・・通常マジック「テラ・フォーミング」次のターンエフェクト確定。

さらに、手札からフィールド魔法ダークシティー発動後、守備表示のダイヤモンド街を攻撃表示にし、バトルフェイズだ。

ダイヤモンドガイAで、フレイムウイングマンに攻撃、その時ダークシティーの効果でD・HEROが攻撃するモンスターの攻撃力より低い場合攻撃力を1000Pアップさせる」

ダイヤモンドガイA ATK1400+1000=2400 VS

フレイムウイングマン ATK2100 = 300

理樹 LP4000-300=3700

恭介「さらに、ダイヤモンドガイBで、カードガンナーを攻撃」

ダイヤモンドガイB ATK1400 VS カードガンナー A
TK400 ≡ 1000

理樹 LP3700 - 1000 ≡ 2700

理樹「この瞬間、カードガンナーの効果発動。さらにリバーズカードオープン「ヒーローシグナル」。恭介これ以降に何かある？」

恭介「いや何も無い。進めてくれ」

理樹「じゃあ、チェーン処理、チェーン2「ヒーローシグナル」の効果で、フィールド上のモンスターが破壊された時発動。デッキから4以下の「E・HERO」と名のつくモンスター1体を特殊召喚。僕は、この効果で「E・HEROフォレストマン」を守備表示で特殊召喚！さらに、チェーン1の処理カードガンナーの効果はこのカードがフィールド上から墓地に送られたときカードを1枚ドロ―するよ」

恭介「メイン2に入り。カードを2枚セットしてターンエンドだ」

恭介 LP4000 手札3枚

理樹「僕のターン、ドロ―。」

「スタンバイフェイズ時「フォレストマン」の効果発動。デッキまたは墓地から「融合」を1枚手札に加える。これにより、デッキから僕は、「融合」のカードを選択して手札に加えるよ。」

メインフェイズ、手札から魔法カード発動「融合回収」このカードは、墓地にある「融合」と「融合に使用したモンスター」を1枚ずつ手札に戻す。これにより僕は、「融合」と「E・HEROフェザーマン」を手札に戻す。そしてそのまま魔法カード発動「融合」手札の「フェザーマン」と「E・HEROワイルドマン」を融合し、融合召喚あらわれて、「E・HEROワイルド・ウイングマン」そして、「ワイルド・ウイングマン」の効果発動。手札を1枚捨てて、フィールド上の魔法、罠カード1枚破壊する。これにより手札1枚を捨てて、「ダークシティー」を破壊し、バトルフェイズ。「ワイルドウイングマン」でダイヤモンドガイBに攻撃」

ワイルドウイングマン ATK1900 VS ダイヤモンドガ

イB ATK 1400 ≡ 500

恭介 LP400 - 500 ≡ 3500

恭介「モンスターが破壊された瞬間、トラップ発動「デステイニシグナル」。これはさっきに理樹が使った「ヒーローシグナル」のD・HERO版だ。デッキから 4 以下のD・HERO・・・ダイヤモンドガイC（3体目）を守備表示で特殊召喚」

理樹「また「ダイヤモンドガイ」って恭介どんだけ使いたいのさ」

恭介「さあゝな。でも面白いからいいだろ」

理樹（今のところ全部通常魔法じゃん）

「まあゝいいけど・・・僕は、カードを1枚セットしてさらに、「ワイルドウィングマン」の効果発動。手札1枚を捨てて、「D・シルド」を破壊してターンエンド。

このターン理樹が捨てたカード「E・HEROスパークマン」と「融合」（2枚目）

理樹 LP2700 手札0枚

恭介「俺のターンだな、ドロー」

「スタンバイフェイズ時、前のターンの「デステイニードロー」の効果で2枚ドローと「テラ・フォーミング」の効果で、フィールドカード「幽獄の時計塔」を手札に加える」

理樹（来る恭介のおはこ）

恭介「メインフェイズに入り、フィールドマジック「幽獄の時計塔」発動。これは相手ターンのスタンバイフェイズにターンカウンタ―がのり、12時（4つ）になると戦闘ダメージは0となり、このカードが破壊されるとあるカードを特殊召喚するカードだ」

「だが4ターンもまたないリバースカードオープントラップ発動。「エターナルドレッド」×2このカードの効果は「幽獄の時計塔」の針を2つ進める。よって「幽獄の時計塔」の針は12時を指したよって永続効果で戦闘ダメージは0になる」

理樹（そしてサイクロン発動して・・・）

恭介「手札から魔法カード「手札抹殺」発動」

理樹（えっ！サイクロンじゃない）

恭介「互いに・・・いやこの場合は俺だけが手札をすべて捨ててその枚数だけドロースする。ここで何かチェーンはあるか？」

理樹「何もないけど」（そういえばあだ恭介の墓地に1体しかなかったっけ「D・HERO」モンスター）

恭介「じゃ、「手札抹殺」にチェーンして、速攻魔法「サイクロン」このカードは、フィールド上の魔法・罠カードを1枚破壊する。チェーン処理だ。チェーン2「サイクロン」でおれは、「幽獄の時計塔」を破壊する。そして、チェーン1「手札抹殺」により俺は、3枚のカードをセメタリーに置き、3枚ドロースする。その後「幽獄の時計塔」の効果発動このカードが12時をさしている時にこのカードがセメタリーに置かれたらデッキから「D・HEROドレットガイ」特殊召喚できる。これによりデッキからカモン「ドレットルト」

理樹（きた恭介のフェイバリットカード）

恭介「この瞬間「ドレットガイ」の効果発動セメタリーにいる「D・HERO」を2体まで特殊召喚する」

理樹（さっき捨てた中に、あれがいたらどうしよう）

恭介「セメタリーから復活させるモンスターはこの2体。カモン「D・HEROダッシュガイ」と「D・HEROダイアモンドガイ（1枚目）」さらに「ドレットガイ」永続効果発動、自分フィールド上のモンスターの攻撃力の数値を＋する。ただしこいつ自身の攻撃力は除くがな。よって「ドレットガイ」の攻撃力は・・・6300だぜ」

理樹（ATK6300ってそれに戦闘破壊できない。ほかのに攻撃しても戦闘ダメージは0さてこの状況いかにぬけようか？）

恭介「どうした理樹顔にあけてるぞ」

理樹「楽しい、今僕ものすごく楽しいよ。やっぱデュエルはこうでなくちゃ」

恭介「ふっ。ならこのターン耐えてみる。おれは「ダイヤモンドガ

イ」3体の効果発動、デッキの上から1枚ずつめくる。1回目通常魔法「終わりの始まり」2回目通常魔法「死者蘇生」3回目罠カード「聖なるバリアーミラーフォース」3回目のカードのみデッキの下に送り、残り2枚のカードはエフェクト確定」

「バトルフェイズ。「ドレットガイ」で「ワイルドウィングマン」に攻撃」

ドレットガイ ATK6300 VS ワイルドウィングマン
ATK1900

理樹「ダメージ計算時リバースカードオープン」カードブロック」
このターンの戦闘ダメージを0にするよ。そしてカードを1枚ドロ
ー」

恭介「く、なら「ダッシュガイ」でフォレストマンを攻撃」

ダッシュガイ ATK2100 VS フォレストマン DEF
2000

恭介「「ダッシュガイ」はダメージ計算後守備表示になる。これで
最後だ理樹、「ダイヤモンドガイ」3体で理樹にダイレクトアタッ
ク」

理樹 LP2700-1400-0=1300

恭介「何！」

理樹「危なかったよ。これがいなかったら。墓地に「ネクロガード
ナー」がいるのは知ってたよね」

恭介「ああ。さっき確認したからな」

理樹「なら、僕がさっきドロしたカードはなんでしょう」

恭介「まさか・・・」

理樹「そのまさかだよ。ダメージステップ時「クリボー」の効果発
動。このカードを手札から捨てることで戦闘ダメージは0になる」
恭介「俺はこのターンを終了する」

恭介 LP3500 手札3枚

理樹「なら、僕のターンドロ。スタンバ、メイン1に入り、手札
から魔法カード「フォープオブフィフス」を発動このカードは墓地

にある「E・HERO」5体選択し、デッキに戻す。その後3枚ドロする。さらにこのカード発動したとき場と手札がこのカード1枚だけならもう1枚だけドロできる。」

「僕は墓地にいる、フェザーマン、バーストディー、ワイルドウィングマン、ワイルドマン、ネクロイドダークマンを選択し、デッキに戻し3枚ドロするよ」

「さらに手札から「O・オーバーソウル」発動し墓地にいる。ネオスを特殊召喚。さらに手札からミラクルフュージョン発動、墓地にいる「フォレストマン」と「オーシャン」を除外融合。

氷の世界を制したHERO今ここにきてください。融合召喚「E・HEROアブソリュートZERO」そして最後の1枚は魔法カードパラレルワールドフュージョン「平行世界融合」

恭介「それがあの世界とここをつなげたカード5枚のうちの1枚か」
理樹「うん、このカードは除外されている」「E・HERO」を2体デッキ戻して融合するカード。この効果によりさつき除外した「オーシャン」と「フォレストマン」をデッキに戻し、融合するよ。

新たな深淵となりし楽園を守りしHEROよ今ここに現れよ。融合召喚！「E・HERO THE・アース」

恭介「それが、2枚目のカードか」

理樹「そうだよ。「ジ・アース」の効果発動フィールド上に存在する「E・HERO」をリリースし、そのモンスターのATK分アップする。これにより僕は、場の「ネオス」と「ZERO」をリリースし、その攻撃力分アップ「地球灼熱—ジアースマグナ」」

恭介「だが、俺のフィールド上に「ドレットルート」がいる限り、俺への戦闘ダメージ・・・何、俺のフィールド上が凍っているだと」
理樹「言い忘れてたけど、「アブソリュートZERO」がフィールドを離れたとき効果発動。相手フィールド上のモンスターをス出て破壊する」

恭介「何！」

理樹「止めだよ。「ジ・アース」で恭介にダイレクトアタックだよ。

地球灼熱斬——アースマグナー・スラッシュ

恭介 LP3500-7500"-4000

WIN 理樹

第1話 前日？（前書き）

第1話終了

第1話 前日？

デュエルが終わってから数分間たわいのない話をしていた。

恭介「理樹の勝ちか」

理樹「あぶなかったよ。最後に「フオープオブフィフス」と「クリボー」のおかげだよ」

恭介「ああ、あれには驚いたぜ。「ネクガ」はわかってたがまさかあのドローで「クリボー」を引くなんてな」

（理樹のやつ向こうの世界から帰ってきてからというもののドロー力が以上になってきてる）

理樹（そういえばさっき変な声が聞こえたような気がするけどきいてみようかな）

「恭介きき」

葉留佳「理樹君みつけたあー」

後ろから声がせ僕の声を遮った

恭介「おっ！なんかみんな来たみたいだな。どうした？」

理樹「いやなんでもないよ」

（別にいいかな悪意みたいなのが感じるわけじゃないから）

そうその時僕はちゃんと聞かなかった。

だが、それがしなかった僕があまかったそれが今後どうなるかを左右していたのに・・・

恭介「・・・そうかなら行こうぜ。俺たちリトルバスターズのリーダーさん」

理樹「まだ見習いだけどね」

恭介「そうか。俺は今すぐにも渡していいと思ってるぜ」

理樹「かいかぶりすぎだよ。恭介」

恭介「そうか？そうでもないような気がするがな」

理樹（そう僕はまだ恭介の位置には立てない・・・そうまだ）

恭介「とりあえずいこうぜ理樹」

理樹「うん」

・・・・・・・・・・・・・・・・

とある場所にて

4枚の写真を持った謎の男

？？「そうかわかったそのまま前線を維持してくれ。くははははは」

（とりあえず、最初の段階はクリアだな。待っている直枝理樹、

イマジンプレイカー、超電磁砲・・・そして棗・・・）

（恭介）

ビリビリビリ

と写真を破り捨てるのであった。・・・

第1話 前日? (後書き)

朱鳳鈴「お久しぶりです。読んでくれた人ここまでかくのに時間か
けすぎですね。

できるだけ早くしたかったのですが、テストとかあって大変で書く
時間がほしいです。

さて、僕1人で語るのも面白みがないので、ゲストというかここで、
僕とあとがきを語るもう一人のかたを呼びましょうか。

それじゃ、行きますよこの作品で、無理やり起こされて自虐モード
になった。朱鷺戸沙耶さんです」

沙耶「なんて紹介してるの?それはあなたがやったことですよ」

朱鳳鈴「ぐっ、あなたを自虐モードにするには、あんな形しか思い
つかなかったと作者が」

沙耶「そう、あなたは死にたいらしいね」

朱鳳鈴「えっ?あのくなんですか?それ」

沙耶「ワルサーP38 (エアガン)よ」

朱鳳鈴「当たったらどうなります。それ?」

沙耶「痛いでしょうね」

朱鳳鈴「いや”痛いでしょうね”じゃなくそれものすごく痛いから、
それになんて僕にするのですか?」

沙耶「大丈夫。死なない用にするから」

朱鳳鈴「って、やめて、うわーーーーー」

数分後

朱鳳鈴「死ぬかと思った」

沙耶「言ったでしょ、死なないようにするって」

朱鳳鈴「死ぬほうがいっそ快樂という文字もあるのです。ってこと
は言わないほうがいいな方途に殺されるかもしれん」

沙耶「で、ここはどんなことするところなの？」

朱鳳鈴「次回予告や今日の最強カードをすることです。」

沙耶「そうじゃさつさとやるわよ。」

朱鳳鈴（あなたがあんなことしなければ早く終わっています）
バン

朱鳳鈴「えっ！」

沙耶「早くしなさい」

朱鳳鈴「はい」

朱鳳鈴「次回、なんと僕、朱鳳鈴VS」

沙耶「理樹君」

朱鳳鈴「えっ！」

沙耶「なんか言いたいわけ」

朱鳳鈴「いえ・・とりあえず進めて・・ぶつかる魔法使いとHEROその勝者は？」

沙耶「そして最後に出てきた謎の男とは？ いったい」

朱鳳鈴「ちなみにこの物語は第1章だと思ってください」

沙耶「あれこの物語って章制だったの？」

朱鳳鈴「いえ、ただリトバスのものとかを入れたくなったと作者が」

沙耶「なんだ作者は死にたいのね」

朱鳳鈴「言わないでおきましょう」

・・・・・

朱鳳鈴「今日の最強カードは、『E・HEROアブソリュートZERO』」

沙耶「HERO+水属性モンスターという縛りの緩い融合モンスターだわ。」

このモンスターがフィールドを離れたら相手フィールド上のモンスターをぜんぶ破壊してしまうモンスターよ。

あとフィールド上の水属性モンスター1体につき500P攻撃力が

アップするわ」

朱鳳鈴「このあたりからHEROデッキは強くなったといってもいい。

さらにこのモンスターは、上記のとおり離れただけでサンダーボルトなんてふざけてる」

第2話 ぶつかり？（前書き）

やっところさ第2話です。

第1話は会話文が多いと先輩の方に言われたことをいあかしてみました

まあゝ相変わらずのぐだぐださなので注意してください。

第2話 ぶつかり？

s a i d 朱鳳鈴

時を大会1か月前に坂に上る。

カンカン

どこからか音がする。

「ハア、ハア、ハア。み・見えた。ここが屋上だな」
そして思いつきり開けて叫んだ。

「ここはどこだぁー」

僕は今混乱している。

いきなり変な空間に吸い込まれたとおもったら机の上で寝ていてあ
るうことが、あるうことが。

??「朱鳳鈴君、何してるのですか？さっさと教室戻りますよ」

「先生、ここはいつたどこですか？」

??「何言ってるんですか。あなたは、ここは学園都市であなたは
個々の学校の生徒でしょ」

何だとして僕は現実世界からここにとばされたのか？
いいのかそんな非現実的なことが起きても。

「そういえことじゃなくてですね。・・・え」と

どうしようまだ頭の整理ができない。

??「また忘れたのですか?しょうがないですね。今回は最後ですよ。私の名前は月詠小萌先生つぐりみこもえです。思えましたか?」

「はい、子萌先生一つ聞いてもいいですか?」

小萌「はい、为什么呢?」

「ここ本当に、学園都市なのですか?」

小萌「ええ、ここは昇進署名学園都市にある。学園ですよ」

これは何回聞いても同じ答えかな。
うーん、ならここで俺がとる方法は・・・。

「そうですか、すみません。昨日いろいろとあり、疲れていて、頭の中がパンク寸前だったのですよ。はは」
つてもものすごいごまかし方だな。ほれ見る小萌先生がポカーンってなてるぞ

「とりあえず、先生戻りましょう。教室に、みんな待ってますよ」

小萌「そうですね。あなたへの説教は、放課後にみっしりするので、覚え解いてくださいね」

教室に戻る途中に、まとめてみた。

確か、あっちの世界で、いきなり目の前に黒い渦の巻いたものが出てきて、吸い込まれる。そして気が付いたら、この学園の生徒でおかつここは学園都市であること。
ってホント非現実的だな。

そのあとのことを話そう。同じクラスの上条当麻かみじょうとうまと土御門元春つちみかどもとはるにいろいろきかれたが条件を付けてこたえてやった。

まあ、大体アニメ第2期の大覇星祭だいはいせいさいがおわって上条さんたちがイギリスからかえってきた直後。

そしてここ数年で新しい祭りごとが起きたらしい、その名も大覇戦だいはいせ符祭んぷさいという遊戯王デュエルモンスターの大会が行われていることそして今の期間は、デュエルしてなんぼらしい。

さらに驚いたのが、この大会の主催者だ。主催者はKC社長かい海馬かい瀬戸はせとということ。さらに、参加者の中には武藤遊戯むとうゆうぎ、城之内勝也じょうのうちかつや、当然、海馬社長もでるということ。

「はあ、なんか大変だな」

時を戻して大会当日

「じゃあまたあとでな」

上条「ああ、負けるなよ」

「わかってる。お前とは、決勝でデュエルしたいもんな」

上条「そういうことだ」

インデックス「なんか、私だけ空気になってない」

「はは、インデックスさんも決勝の舞台で会いましょう」

というと、みんなとわかれて数時間順調に勝っていけている。・・・そういえば、まだルールを言っ
てなかった。

この大覇戦符祭はどうやら、バトルシティーをモデルにしているらしい。よってパズルカードシステムなのだが、人数が多いので、予選を2回し、2回目の予選を見事勝ちゆいたら、本選出場し、決勝となること。

てなぐわいになっている。

「にしても、のどが渴いた」

言い忘れたが、今僕がいるのはとある公園だ。そして当然目の前に自販機があるがこの自販機は、お金を入れても取られるだけなのでこうする。

「ふうー。でやあーーーーー」

ドガ・ガシャン

「さてなにな。お！NEXじゃねか。あたりだぜ」

とあけて飲もうとしたとき。

??「えーーーーーーーーー」

いきなり声がしたので、振り返ってぼくはびっくりした。ここにこいつがいるんだ。

そう僕が見た人は……リトバス、主人公……直枝理樹のすがただった。

第2話　ぶつかり？（前書き）

話がめちゃくちゃだ。

いやもう、くちゃくちゃだ。

はっきり言って、書いた本人もよくわからないこと書いてるなあ
という意識あり。

第2話　ぶつかり？

s a i d ─ 理樹 ─

今日は大会当日。

で、今僕たちは大会のルール説明を終えてから僕たちリトルバスターズは別れた。

そして、僕は勝ったり負けたりしながらパズルカードを集めていたが、のどが渴いたので、近くの公園でジュースを買おうとしたときに、自販機に近くに人がいたがその人は・・・

ドガ、ガシャーン。

「えーーーーー」

いきなり自販機にキックをした。

s a i d ─ 朱鳳鈴 ─

何でいるんだ。なんでこの世界に、いるんだ。直枝理樹が・・・。
あと、なんでいきなり自販機をけたのかって顔だな。変に言われる前に言っておくか。

「ああ、ここの自販機に金いえて買つと金とられるんだよ」

s a i d ─ 理樹 ─

「えっ！そうなのですか。ありがとうございます。ってあなたもデュエリストとなのですか？」

そう、その人の手には、僕と同じデュエルディスクをしているので聞いてみた。

朱鳳鈴「ええ、そうですが・・・そういうことが」

「どうしました？」

朱鳳鈴「今は気にしないでください。単なるつぶやきです。ん・・・え」と？」

「あつ！自己紹介してなかった、僕は、直枝 理樹です。え」と

朱鳳鈴「ごめんなさいこつちも教えていませんでしたね。僕は、朱鳳鈴といます」

「そうですか。じゃあ、朱鳳鈴さん僕とデュエルしてください」

朱鳳鈴「いいですよ、カードは何枚がけにしますか？」

「そうですね。なら、2枚掛けにしましょう」

朱鳳鈴「わかりました。それじゃ・・・」

朱鳳鈴・理樹「デュエル」

s a i dー朱鳳鈴ー

ちよつと時間を戻して

理樹「えっ！そんなのですか。ありがとうございます。ってあなたもデュエリストとなのですか？」

「ええ、そうですが・・・そういうことか」

やっと、わかった。今回の大覇戦符祭は外の学校の生徒が何名か代表でくるって言うてたな。当麻が、すっかり忘れてたぜ。ぜんぜん聞いたことがない学校だからスルーしていたが、理樹たちの学校だったとは、それじゃ、リトバスマンバーともデュエルできるかもしれないということか。これはわくわくするな。

理樹「どうしました？」

しまった。

「今のは気にしないでください。単なるつぶやきです。n・・・え」と？」

あぶな。あいては、俺の名前を知らないのに、名前を呼ぶかけたわ。危ない危ない。

理樹「あっ！自己紹介してなかった、僕は、直枝 理樹です。え」と

「ごめんなさいこつちも教えていませんでしたね。僕は、朱鳳鈴といます」

理樹「そうですか。じゃあ、朱鳳鈴さん僕とデュエルしてください」

「いいですよ、カードは何枚がけにしますか？」

理樹「そうですね。なら、2枚掛けにしましょう」

「わかりました。それじゃ・・・」

朱鳳鈴・理樹「デュエル」

第2話　ぶつかり？（後書き）

朱鳳鈴「質問があつたので答えます」

沙耶「理樹君と恭介さんのデッキについてよ」

朱鳳鈴「何の違和感なく入ってきましたね」

沙耶「いいじゃない。さつさと言うわよ」

朱鳳鈴「え」と理樹にE・HEROを使わした訳は、恭介たちの作った世界と理樹と鈴でつくったがあつた世界……。つまり、世界↓GXのユベル編↓超融合↓十代みたいな感じですよ。ついでに言うのとE・HEROのほうも使いますがN系統の融合は、違う人が使います」

沙耶「ものすごい適当完だわ」

朱鳳鈴「そうですね。作者はでも作者が言ってるんですからいいじゃないんでしょ。で、恭介にD・HEROなのは、D・HERO「ディステイニー」運命「理樹や鈴の運命を分けた人って感じらしいです」

沙耶「ちよつと、作者暗殺してくるわ」

朱鳳鈴「そうですか。きよつけてください」

.....

作者「おわったー」

トントン

作者「あいてますよ」

バンバン

作者「え！」

沙耶「ちよつと、話したいことがあるんだけど、いいかしら」

作者「ちよつとまって、それ本物ですよ」

沙耶「問答無用」

そのあと作者を見たものは……。想像に任せます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5683u/>

とある戦符と決闘正義（デュエルバスターズ）

2011年10月9日08時11分発行